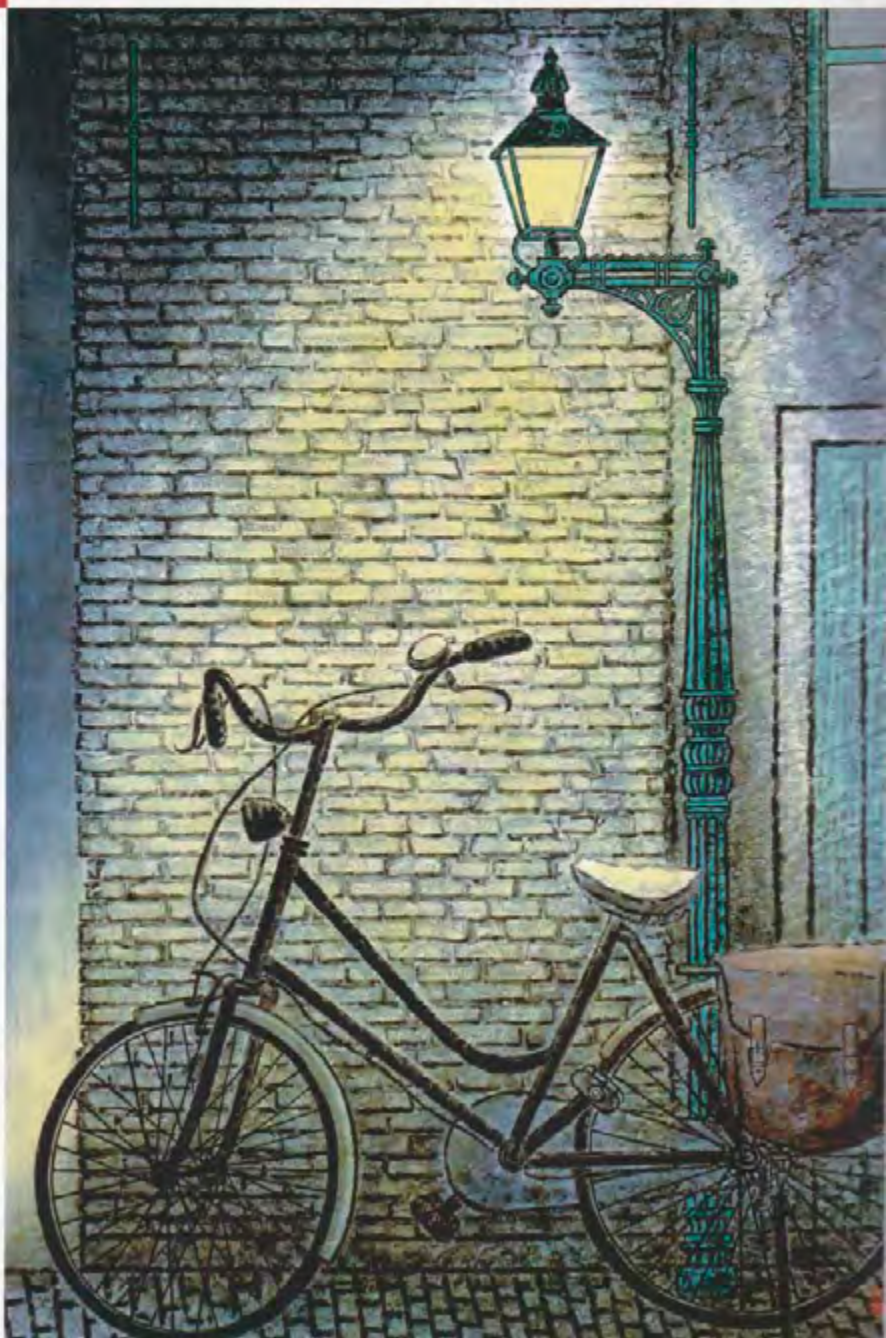


沖

12
2017

俳句雑誌【おと】



鷹の天

能村 研三

波郷忌

十一月二十一日は波郷忌である。

落葉焚く煙の中の波郷墓碑 登四郎

熱爛や人が波郷を言へば泣き 翔

我が家には父が愛蔵していた石田波郷の掛軸があり、存命中は、好んで床の間に掛軸をかけた。

波郷の軸は

吹きおこる秋風鶴をあゆましむ

初蝶やわが三十の袖快

鶏頭の澎湃として四十過ぐ

「鶴」の軸は単独で、「初蝶」と、「鶏頭」の句は二句が一緒に揮毫されたもので、我が家の家宝として大切に保管しながら、私も時折床の間に掛けて楽しんでる。

波郷は登四郎より二つ年下であるが、俳句では兄弟「として、第一句集『咀嚼音』を刊行するにあたっては、選句、跋文、出版社の世話、扉の題簽、著者の近影写真まで、ありとあらゆる事を世話していただいた。

登四郎は昭和二十三年に

ぬばたまの黒節さはに良寛忌

の句で馬酔木の巻頭をとった。しかし、昭和二十九年に刊行された初版

新海苔の経木づつみにぎりめし

神の留守夢の最中も忙しき

佐原三句

小江戸にて小半機嫌秋惜しむ

ゆく秋のぐいと飲み干す試し酒

忠敬に余生はあらず鷹の天

葉末より紅葉始まるはにかみて

浜菊の潮に晒さる崖つぶち

ひたむきな二番穂の列雲迅し

一徹の風貌を見るくわりんの実

ポケットに同床異夢の鍵・木の实

の『咀嚙音』には波郷の選に漏れたため収録されていない。

馬酔木に復帰したばかりの波郷は、この句が馬酔木で高く認められ、新人達の間でも刺激的な評価を得ているのを見て奇異に感じ、情緒や繊麗な叙法は、趣味的にすぎて戦後俳句のうち立てるべき新人の仕事とは思えないとしてこの句を句集の選に入れなかった。これに対して登四郎は尊敬していた波郷の言葉だけに少なからずショックを受けたという。この話は波郷と登四郎の関係を論ずる時に必ず引き合いに出されることである。『咀嚙音』初版刊行から二十年後の昭和四十九年、波郷が亡くなって五年後に出された定本には、二十年の歳月が経過し自らの俳句観が人間や生活というものにそれほど固執しなくなったとして、「ぬばたま」の句をはじめ三八句が加えられている。

登四郎は、波郷から主宰誌を持つことを強く勧められ、波郷が亡くなった翌年の昭和四十五年に「沖」を創刊した。

この時の波郷の厳しいと思える忠告があったからこそ、登四郎が常に自己更新を繰り返し、命が尽きるまで俳句に真摯に向き合えることが出来たのだと思う。

蒼茫集



庭いぢり

望月晴海

銀杏散る松は尽して松の色
ちぐはぐに着て秋寒の庭いぢり
淋しさのふつとなごめり芙蓉咲き
貝塚や白まんじゆしやげ曼珠沙華
貝塚は史実の宝庫実むらさき
竪穴にこもるいぶり香小鳥来る

露の晩期

溯上千津

五千年

楠原幹子

秋高しすだ椎千の枝を張り
* 五千年変らぬものに素風かな
空つぼの抽斗木の実入れてやる
さながらに大海夜の鱗雲
長居してゴリラの秋思もらひけり
稲光われの弱気に突き刺さる

麦ごはん囓みなれ露の晩期澄む
星月夜ささやきを聴く耳欲しき
流星や身を裂きし些事誰も知らず
* 露の身の今の一刻何為さむ
詠めば又淋しさ滾つ雁来紅
山气和ぐや群れ赤とんぼ河なせり

深 海 辻美奈子

* 月光や深海に降るものの嵩
式部の実ほろほろ空気濡れそむる
けふの旅とす秋日傘さしてより
秋風の切り取り線を辿るかな
烏瓜みんな帰つてしまひけり
うぶすなに時の降り積む秋の雨

浮 枕 千田百里

矢を受くる的の短音秋澄めり
鯨舟に暗黙の距離ありにけり
酒蔵を守りて能登訛りの澄める
* 思秋期と言ふあらば今吾亦紅
十六夜や礁は浮沈たのしめる
しんがりに月光の地を踏む機長

落し水 森岡正作

蔵町の蔵くろぐろと後の月
充実の一日の釣瓶落しかな
落し水ぞろぞろ星を引き連れて
極上の酒に金粉賜 猛る
毬栗の次男坊より殻を出づ
* 新米の名が口火切る国自慢

柿送れ 安居正浩

* 故郷の空見たいから柿送れ
こんな世を許してしまふ秋桜
新蕎麦といふやはらかき武骨もの
芒原時間吸はれていくやうな
白毛布かはいい嘘を聞いてゐる
コスモスが咲けば遠くがよく見ゆる

奥羽の力

甲州千草

問診票

林昭太郎

渡す手も渡さるる掌も桃香る

* 飛石の締まつて来たり神の留守

町並のくつきり浮く日種を採る

注釈の少し長くて濁り酒

並び出す青空市や文化の日

鯉濃は奥羽の力根雪雲

* いち早く秋風を聴く象の耳

動くものみな影を曳き秋彼岸

郷愁に色あらばこの赤蜻蛉

楽聖の囲む教室小鳥来る

内定を貰ひし衿の赤い羽根

秋澄むや問診票のどれも「はい」

鶏頭に潮鳴りに

荒井千佐代

望の月

上谷昌憲

こすもすやローカル線は湾に沿ひ

車窓より小さき漁村の秋祭

廃鉱の島の削られ土用風

敬老の日にはとり腹の底から鳴く

昼までをパジャマで過ごす賜日和

* 鶏頭に潮鳴りに闇深くなる

* 職辞すやさうか今宵は望の月

敬老の日の日の丸のたるさかな

審判の右手が拳がり秋の虹

つつましく通草の並ぶ物産展

秋雨の始発電車に赤子ぬて

ドローン浮く色なき風の裏おもて

風神の息

藤原照子

さやけしや貝塚抱く総の国
縄文の火起こし法師蟬しきり
*天高し疾駆の騎手の背の水平
省略の年ごとに増え月今宵
待つとなく待つ返信や秋海棠
風神のいま吐きし息秋の雲

コスモスの風

高橋あさの

空の藍深くし柿の熟るかな
田の神の安らぎをらむ稲架日和
礫石にしばし温もる秋思かな
頭の芯をコスモスの風吹き抜ける
晩秋の杜はけもの匂ひせり
*遠くなるものばかり増え秋しぐれ

鯨揚げる

福島 茂

反抗の無口を通す榎植の実
遅れきて油のほひ夜学生
深川飯汁だくだくにして無月
夫の服着せて案山子を立たせをり
*鯨揚げる拍手のやうな音立てて
男にも実家のありて柿を食ふ

芒 原

宮内とし子

*分け入りて過去置いてくる芒原
ときどきは休むも技か鉦叩
石垣の石の凸凹穴まどひ
鱷跳ぶやべカ舟にある浦安史
敷きつめし貝殻の音秋深し
冬近し指につきたる釘の鏝

潮鳴集



一粒の種

内山花葉

*種を採る吾も一粒の種ならむ
原点到立ち戻らむと濁り酒
転調の琴や笥の水澄めり
保育器の君爽やかに選挙権
木枯の来るぞと椋鳥の群れ騒ぐ

水に空

七田文子

*手に掬ひし水に空あり秋であり
曼珠沙華袴き合うてなほ孤独
灯火親しパン屋は灯下忙しくて
残照の微塵のひかり群とんぼ
釣瓶落しに瞬の暗転四囲の山

初紅葉

五十嵐章子

*胡桃割る捨てられぬ物どうしやう
開くたびどつと残暑の乗り込めり
秋夕べ無になりたくて鍋みがく
道一つまちがへ出会ふ初紅葉
いわし雲めざすホテルは坂の上

四角張る

篠藤千佳子

*いわし雲街のだんだん四角張る
秋日濃し古地図片手に紀尾井町
夕焼を背負うて来たる三輪車
盆踊スマートフォンを持ち替へて
洗面所の鏡よく拭く無月かな

密約 諸岡和子

*大時計振り子の幅にある秋思
灯下親し眼鏡二つを使ひ分け
密約の罅割れ残るざくろの実
牧の牛色なき風を反芻す
ことづては雲に託して秋燕

からくれなゐ 石田 静

*秋澄むや大志を描くための空
彼岸花からくれなゐの風と消ゆ
をちこちに秋ちりばめし手漉和紙
滑り良き筆の多言や秋すすむ
指笛に犬秋風を抜いて来る

月の引力 能美昌二郎

*有明や月の引力見ゆる海
霧の瀬戸肅肅として海動く

月の影踏んで火宅の人となる
埋もれる境界石や葛の花
濁り酒宴手拍子足拍子

楽器工房 埴誠一郎

*木の香る楽器工房秋の昼
普段着の証明写真鳥わたる

浦安吟行

冷やかな帳場を探るのぞき穴
明日からのことはさておき秋の晴
神宮の第二球場十三夜

島唄 齊藤 實

*島唄の声裏返る良夜かな
秋の日を思ふ存分河馬の口
鯊煮るや舟の出払ふ舟溜り
ひぐらしの声や珈琲冷めてゆく
鰯雲プラスチックの列正す

飛鷹選評



能村 研三

木の実落ち 太古の詩歌はじまりぬ 稗田 寿明

太古の昔、人々はどんな言葉で話していたのだろう。縄文時代の土器や住居跡などはその痕跡を手掛りに、ある程度の復元は出来るが、言葉に関しては何の手掛りもない。しかしあれだけの優れた文明がある以上言葉もさることながら、人々の間で何らかの詩歌が詠まれていたに違いない。自然の変化にも敏感で、木の実が落ちる季節にはどんな思いでその風景を眺めていたのだろう。

不意といふ咲き方のあり 曼珠沙華 兵藤 恵

曼珠沙華は特殊な成長の様子をみせてくれる植物である。真っ赤な花が一面を覆う風景の中に、なぜか葉の姿がない。花が咲くときには葉が出ておらず、葉が出る頃には花が散ってしまふ不思議な植物なのである。突然に花茎をぐいぐい伸ばし一週間ほどで蕾を作り、花が咲く雰囲気のないところに不意に花を咲かせて人々を驚かす。

二百十日 利休鼠の海風ぎて 秋山ユキ子

立春から数えて「二百十日」目。大風がおこりやすい頃で、ちょうど稲の花が開花することから、農家では風を恐れて「厄日」とした。俳句で「厄日」といえば「二百十日」を指し、「厄日」も秋の季語である。利休鼠というと、北原白秋の「城ヶ島の雨」の歌を思い出す。利休が好んだ緑色がかつた鼠色のこと、日本人にとって大切な色である。嵐の前の静けさともいうのか、海は凪いでいるものの利休鼠色した海の面が不気味に見えた。

畦染むる宝冠の列 曼珠沙華 三留 早苗

秋の彼岸の頃になると、田の畦に彼岸花の朱色がずらりと並ぶようになる。時を違えずいつせいに咲くので、畦が真っ赤に染まるようにも見える。花も不思議な形をしていて茎の上に冠を乗せたようにして咲く。

竹籠に竹のきちきち涼新た 吉武 美子

竹で編んだ籠は細い竹のしなやかさを最大限生かして非常に軽やかな孤を描き、美しく使いやすい。丁寧に編みこまれた籠の目は美しさだけでなく、強度もしっかりと保たれており、作った人の繊細な美意識に驚かれる。

秋天や駱駝の背のやはらかし 十畑 悦雄

瘤がある駱駝の背中にはいかにもやわらかそうだ。背中に乗る

沖作品



能村研三選

ファンファーレ馬場を飛び立つ赤とんぼ
棟上げの幣串立ちぬ秋うらら
詩の神のひとりごとなり月鈴子
車座に火を見つめぬる秋の声
* 木の实落ち太古の詩歌はじまりぬ
半地下の二百十日のバーにをり
不意といふ咲き方のあり曼珠沙華
稲雀埃のやうに立ちにけり
ぶら下がる力ありけり糸瓜熟る
赤土の大地の暮らし銀河夜夜
* 二百十日利休鼠の海風ぎて
掃除機のコードくるくる小鳥来る
筆洗ふ秋水墨の藍色に
先師句碑へ一本添ふや曼珠沙華
卒塔婆の著き墨痕つくつくし

千葉

稗田 寿明

静岡

兵藤 恵

神奈川

秋山ユキ子

(延寿寺句)

* 畦染むる宝冠の列曼殊沙華
洞の木の四つ伐り転び九月尽
そぞろ寒ダム底へ乗る昇降機
見送るや釣瓶落しの後ろ影
* 長き夜の「愛誦の詞華」気韻満つ
竹籠に竹のきちきち涼新た
大根蒔く固き土くれ手に砕く
型染の木型に扇子風は秋
芸術祭初学の夢はピアニスト
アプレタン・ナイト千夜一夜に虫さだく
* 秋天や駱駝の背のやはらかし
山を恋ふ空の蒼さの濃竜胆
人去りて山影の伸ぶ稲架の里
どぶろくを酌み合掌の自在釣
表札を屋号で徹す新走り

新潟

三留 早苗

福岡

吉武 美子

栃木

五十畑悦雄